

□ 次の物語は、中国の伝奇小説『西遊記』を題材にしており、三蔵法師・孫悟空・猪八戒・沙悟浄の四人のうち、ある登場人物の視点で捉えた外伝的な物語である。読んで、あとの問いに答えなさい。

「悟能や——」

そのとき、三蔵法師の澄んだ声が静かに洞内に響いた。

「悟能や」

師父はふたたび八戒が観音菩薩から授けられた法名をお呼びになった。

「ならば、なぜお前はこの取教の旅に加わっているのです？ 西天を目指し、ただひたすら歩くだけの日々こそ、お前の嫌う『（X）』そのものではないですか」

俺はハツとして、八戒の向こうにおぼろに浮かぶ人影を仰いだ。

「それは——お師匠様」

八戒はもともと身体を動かしながら、気恥ずかしそうな声で答えた。

「お師匠様たちとともに、旅をしているからですよ。だから、俺は逃げずにやっています」

「逃げずに？」

およそ八戒らしからぬ言葉に、俺は思わず問い返した。

「悟浄、本当は俺は知っているんだよ。過程こそがいちばん苦しい、ということだね。さらには天界と違って、この人間界ではそこに最も貴いものが宿ることもある、ということもね——」

八戒が次の言葉を重ねようとしたとき、ずいぶん遠くのほうから岩の崩れるような、何か重たいものが衝突したような響きが、激しい震動とともに伝わってきた。次いで、大勢の妖魔たちの喚声と悲鳴がこだまとなって届いた。ああ、やっと来た、遅いよまったく、と詰るようにつぶやいたのち、

「私はそのことをあの男から学んだのですよ、お師匠様」

と八戒はどこか 笑いを堪えるような声で告げた。

「あのがさつで、乱暴者の、どうしようもない悪ザルからね」

その言葉を引き取るように、我々が捕われた空洞を塞ぐ、ぶ厚い扉がドンと鳴った。外部との境目が少し開いたのか、暗闇に支配された洞内によくやく明かりが入り込む。しかし、扉の外側が妙に赤く映ることを訝しんだ途端、猛烈な熱風とともに扉が吹っ飛び、その向こうに轟々と炎を纏った火竜が姿を現した。

「ご無事でしたか、お師匠様ツ。悟浄に八戒ツ、まだ生きていますか！」

火竜の背に跨った悟空の到着を伝える大音声、岩をも振らすほどの勢いで洞内を駆け巡った。

▲ 俺は歩いている。

俺の目の前には、見渡す限り、いつ終わるとも知れぬ砂漠が広がっている。

悟空は正面を睨みつけながら先頭で手綱を引き、馬上では師父がゆらゆらとうつむき加減に揺れている。その後ろには八戒が従い、奴が「暑い」とこぼすたび、俺の目の前で肩に担いだまぐわの先が、落ち着きなく位置を変える。

両のわきから、背中から、ぐっしりと汗に濡れる八戒の直綴を背後より見つめながら、俺は金峯洞の外に出る途中、八戒が小声で放った言葉を思い返した。

「実のところ、俺は人間が住む下界に来て初めて知ったんだ。人間という生き物が（Y）する存在である、ということだね。おいおい、そんな妙な顔をするなよ。だって仕方ないだろ？ 俺はずっと天界で、天神地仙に囲まれて生きてきたんだ。お前も知つての通り、彼らとはかく人間とは真逆の存在だ。謂わば未来永劫、変わらないことを義務づけられた『絶対』の存在だ。そこには初めから過程はない。ただ、完成された結果があるのみだ。それに対し、人間の何という未熟で脆弱なことだろう。こうして人間にふたたび生を得た途端、俺が怠け者のぐうたらに成り下がってしまったのも、過程を拒絶した者が行き着く当然の帰結だと言えやしないか？ でも、俺は今の姿が嫌いじゃない。実のところ、天蓬元帥のときよりも、少しばかり今のほうが好きだよ」

耳のわきをすり抜けていく風を追って、俺は後ろを振り返る。なだらかな砂丘が幾つも重なる風景の中央に、一つの線が揺れながら続いている。その線はときどき砂にかき消されながら、われわれの足元へとつながっている。

結局、あの洞穴で、八戒が悟空の何を見て旅を続けることを決めたのか、続きを聞くことはできなかった。その後になって訊ねても、「よせやい」とすぐさま一蹴されてしまった。ただ、

「あのサルは大したもんだよ。悟空は確実に変化している。この取教の旅を経て、奴はどれほど強くなることだろう。だから俺も一つ、素直に奴を見習ってみようと思つたわけさ」

と恥ずかしそうに八戒がつけ加えたとき、俺は愛すべきブタがすでに新たな一步を踏み出したことを知ったのである。

手にした宝杖で砂に線を引きながら、俺は考えた。流沙河の底で一人鬱々とした時代を経て、西天を目指し師父や兄弟子たちと旅をするようになり、果たして自分の何が変わったのだろうか。こうして最後尾に従い、無口に荷物を担ぐだけ、という消極的役割しか果たさぬ川底

の石のような存在から、依然、何の脱却も果たしていないのではないか――。

「おい、悟浄」

そのとき、急に後ろから悟空の声が出た。驚いて振り返ると、いつの間にか俺は先頭の悟空を追い越してしまっていた。「どうしたんだ？」

という悟空の問いに、いや、何でもない頭を振って、俺は前方に向き直った。何者の気配も感じられない、どこまでも砂に覆われた、むき出しの大地が続いていた。そこには八戒のたてがみも、埃まみれの師父の袈裟も、悟空のトラ皮の腰当ても見当たらない。完全なる未開の眺めは、自分でも不思議なほど新鮮なものに映った。

俺は隣に追いついた悟空に、

「しばらく、先頭を歩いてもいいかな？」

と小声で申し出た。「ああ、もちろん」と悟空はなぜかニヤニヤ笑いながら了承した。

俺はうなずいて、悟空の数歩先へ進んだ。だが、すぐさま振り返って訊ねた。

「(Z)」

「馬鹿か、お前は」

悟空は呆れた声とともに、手綱を引いて馬の動きを止めた。

「こつちが西天ですよ、と書かれた立て札が、どこかに用意されているとも思ったか？ ただ、自分が行きたい方向に足を出しさえすればいいんだよ！」

その言葉に、俺は刹那、頭を思いきり打ち叩かれたような衝撃を受けた。

「好きな道を行けよ、悟浄。少し遠回りをしたって、また、戻ればいいんだ。もつとも、出来ることなら、最短の道をお願いしたいけど」という八戒の声を受けながら、俺は背中中の荷物を担ぎ直した。

「わかつてるよ」

誰の足跡も見当たらない、砂丘が波のように肩を寄せ合う、未踏の世界が俺の正面に広がっていた。大きく息を吸って一歩足を進めた。踏みこんだ沓に吸いつくように寄せる砂が、やがて細かく崩れていくのを見下ろしながら、進むべき道筋に宝杖の先をぐいと差しこんだ。

その瞬間、俺のなかで少しだけ ④ 生の風景が変わったような気がした。

(万城目学『悟浄出立』より)

【語注】*1 取教……三蔵法師一行の旅の目的は、西天にあるという仏教経典を持ち帰ることである。ただし、それは手段であって、

真の目的は、この旅を通じて魂の成長を促すことであるという説もある。 *2 妖魔……妖怪、魔物の類。

*3 喚声……大きな叫び声、わめき声。 *4 直綴……僧衣の一種。 *5 脆弱……もろくて弱いさま。

*6 天蓬元帥……ある人物が天界にいた頃の呼び名。優秀な水軍の総帥だったということが、ここより前の場面で記されている。

その後、転生しているが、この物語の中では同一の人格として見るべきだろう。 *7 刹那……きわめて短い時間、瞬間。

問一 —— ア「オのうち、A「猪八戒」、B「沙悟浄」にあたる人物をすべて選び、記号で答えなさい。

問二 (X)・(Y) にあてはまる言葉を、本文中の二字の熟語でぬき出しなさい。

問三 —— ①「笑いを堪えるような声」になった理由を、五十字以内で説明しなさい。

問四 —— ②「彼ら」とは、具体的には誰ですか。本文中の言葉で答えなさい。

問五 —— ③「人間」について、「にんげん」ではなく、「じんかん」と読ませています。この場合、どのような意味になりますか。十字以内で説明しなさい。

問六 (Z) にあてはまる会話を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア すまない、どうやって進む道を決めているんだ？

イ やっぱり、君が先頭を歩いてくれないか？

ウ ところで、この先に妖魔は出ないかな？

エ よし、黙って俺についてこい！

オ 間違はなく、こつちが西天だな！

問七 —— ④「生の風景が変わった」とありますが、どのような心境の変化があったのですか。説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

子どもたちが夢を持たなくなったとよく聞きます。しかし、それは悪いことでしょうか。

将来の進路選択には大きく二つの方法があります。一つは目的主導的選択です。(A) という方法です。もう一つは消去法的選択です。(B) という方法です。

目的主導的選択と消去法的選択では、どちらが大切でしょうか。

答えは「(C)」でしょう。夢ばかりが大きくて、その夢のスケールに自分の才能がついて行かず、結局は周囲に迷惑をかけるような人生を送ってしまったのは、褒められたことではありません。ときには慎重な視点に立ち、消去法的な選択戦略で、自分にふさわしい人生計画を練ってみることも必要です。

ただ私は思うのです——この二つの選択方法だけでは、まだまだ視野が狭いと。

米デューク大学のキャシー・デビットソンが米紙『ニューヨーク・タイムズ』に寄せた論説が反響を呼びました。「今の小学生の65%は将来、現在は存在していない職業に就く」という統計予測です。言われてみれば私も、小学生の頃には(いや中高生の頃ですら)経営コンサルタントやIT系技術者がこれほど花形職業になるとは思いもよりませんでした。(A)

つまり、子どもたちが「将来の夢を抱く」ことは、現在存在しているわずか35%の選択肢に自分を制限することに相当します。本当ならばまだまだ自分には潜在性があるのに、限られた可能性に自らを幽閉するのは惜しいことです。(イ)

また、厚生労働省が発表したデータによれば、現在は50%以上の人は転職を経験するそうです。憧れの仕事に就いても、その仕事を生涯やり遂げる人は半数以下なのです。(ウ)

ここでイェール大学のウルゼニフスキー博士らが一昨年に発表した調査結果を紹介しましょう。博士らは米国陸軍士官学校の候補生一万人以上を調査しました。陸軍士官を志した理由についてアンケートを取りました。「軍隊そのものが楽しいから」と内部動機を挙げる人もいれば、「出世したい」「国のために」「家族を守るために」と手段的動機を挙げる人もいます。(エ)

そんな候補生たちが、その後いかに成功したかを、将校に就役できたかを基準に判定したところ、内部動機の高い人の方が、低い人よりも将校になる率が一・五倍高いことがわかりました。これは予想通りでしょう。ところが面白いことに、たとえ内部動機が高い人であっても、手段的動機を多く持っている場合、将校になる率が20%も下がってしまいました。(オ)

単純に考えれば、やる気を維持するためには、目標や夢は多いほどよいと考えがちですが、実際は逆です。(カ)

つまり、子どもたちにとって本当に大切なことは、具体的な夢を持つことでは決してなく、将来どんな世界がやってきても、臨機応変に対応できる柔軟な適応力を準備しておくことだと、私は考えます。(キ)

そのためには、では、どうしたらよいのでしょうか。私は「今おもしろいと思うことをやり続けよう」と伝えたいと思います。いや、「学校の勉強は面白くないぞ」と反論されそうです。しかし、そうとは限りません。実際には、学問につまらない分野はないはずだ。

どんな対象であっても、究めていけばその奥深さがわかり、その面白さに気づきます。知れば知るほど楽しくなります。つまり「つまらない」と嘆くことは「私は無知だ」と宣言していることと同じです。(ク)

だからこそ、教育とは子どもたちに「学びの面白さに気づかせてあげる」ことだと思います。これができない教師自身まだ学問の面白さに気づいていないのでしよう。

教育者は、つい、「こんな風に育って欲しい」と子どもたちに期待しがちです。しかし、教育とは、先生や親の願望を満たすことではありません。むしろ親や先生がいなくても独立した人間として立派にやっていけるように成長してもらうことです。未来への順応力は、学びの楽しさから生まれるはずです。(池谷裕二「学ぶ楽しさは柔軟性を生む!」)

問一 (A)・(B) にあてはまるものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア あちらに進んだら失敗しそうだ、こちらに行ったら苦勞しそうだと思案して、残った安全そうな道を選ぶ
- イ 周囲の人たちがやっているのを見て、自分にもできそうなことをやってみる
- ウ 何をしたらいいか信頼できる人に相談して、その人の意見を尊重する
- エ 周りの人たちがやっていることはとりあえず除外して、だれもやっていないことを選ぶ
- オ 何をしたいのかという目標を立てて、そこに向かって進んでいく

問二 (C) にあてはまるものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 目的主導的選択の方が大切
- イ 消去法的選択の方が大切
- ウ どちらも大切
- エ どちらも大切ではない
- オ 第三の選択を考える必要がある

問三 —— ①「まだまだ視野が狭い」とありますが、では、視野を広くするために子どもたちはどうあるべきだと筆者は述べていますか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問四 次の二つの文は、本文中の(ア)～(ク)のうち、どこに入れるのが最もふさわしいですか。それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- a 「単に好きだからやっているだけ」という人が、最終的によい成果をあげるので。
- b となれば「現在の動機(＝夢)」は、当人が考えているほど重要ではないといえます。

問五 —— ②「未来への順応力は、学びの楽しさから生まれる」とありますが、これは具体的にはどういうことですか。説明しなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

アーサー・C・クラークが、その ^A『未来のプロファイル』で、都市、町村内の極短距離輸送機関の将来のホープとして、馬をあげているのを面白く読んだ。クラークによれば、(馬は完全な自動 ^Bソウジユウ装置と自動チャージ・システムをそなえている上に、いつになつてもけつして型が古くなることはない。おまけに二階バスに勝るとも劣らないほどながめがいい。)

クラークは半分冗談を言っているのだが、その冗談は単に郷愁や、現代文明に対する皮肉から言われているのではない。科学者クラークは、馬の中に、限られた形ではあるけど、一種の理想を見ているのである。生命に対するそういう ^①謙虚なアプローチが、私にはさわやかに感じられた。

自動車と馬を比較して、どっちがすぐれているかと問えば、おそらく十人中九人までは自動車と答えるだろうと思う。それが現代の常識であり、現実である。たしかに自動車の方が速度が速い、^Cゴウゾク距離も長い、雨天でも乗れる、維持費も安い、それになんと言つたつて自動車の方が何十倍も馬力がある。そういう価値基準はもちろん間違つてはいない。(1) 同時に、^②そういう価値判断をさせるものが、現代というこの時代であるということも考えてみて無駄ではないと思う。

言葉をかえて言うと、一見自動車が馬をはるかに追い越したかのように見える時代、それが我々の生きている時代なのである。ところが実際には、^あ或る特定の機能を除いて、自動車は全く馬に及ばない。簡単に言うと、自動車は機械であり、馬はひとつの生命だからである。逆に言えば、自動車は或る部分のみがグロテスクに誇張された、^③生命の下手くそな不完全なコピーと言えるのだ。

(2) 自動車の怖いところは、その非生命が、人間によってコントロールされると、^④一種の擬似生命の如くに動くという事実にある。それは人間の無意識の欲望を強大な機械力で増幅する。人間の意のままにならぬから怖いのではなく、人間を自らの頭脳として人間の意のままに動くから怖いのである。

馬はそれ自身、意識も本能ももった生命体である。それは時に人間よりも鋭敏に ^Dギケンを察知し、意識を失った主人を乗せて、ひとりで家に帰ることもある。人間は馬に頼ることができる。

(3) 私は自動車をやめて、馬に乗れなどと言うつもりはない。ただ我々人間が、生命を真似て機械を作り始めて以来、余りにも自らのエゴイズムの線に ^Eソッつてそれらを進歩発展させてきたということに、或る苦い反省の念をおぼえるのである。技術が先ず(力)という比較的単純な局面に発展したのには、当然それなりの必然性がある。電子技術の進歩によって、我々は今ようやく(意識)の面に足を踏みこんでいる。(力)と(意識)のバランスは、いったいいつとれるようになるのであろうか。人間自身の内部ですら、それは未だアンバランスである以上、我々は自分の間、理性も優しさもない怪物に、自らを託しているよりないのだろうか。

近頃かまびすしい自動車の(安全)問題もつまるどころ人間の心の問題につながる。我々が他者の生命に対してどれだけの畏敬の念をもっているか、それがたとえ明日にも死ぬかもしれない病人の命であっても、どんなにかげがえのないものか、それは道徳以前の問題なのである。生命に対する不感症ではなく生命に対する憧れと畏れのみが、^⑤新しい機械を創造することができる。エンジンなど相も変わらぬOHVで結構である。(安全)においてこそ、自動車は革命を要求されているのではないか。

(谷川俊太郎「自動車から馬へ」)

【語注】*1 アーサー・C・クラーク……イギリスのSF作家（一九一七〜二〇〇八年）。豊富な科学的知識をもとに、現実的な近未来像を描き、二十世紀を代表するSF作家の一人とされる。『未来のプロファイル』は、彼が一九五八〜一九六二年に雑誌に掲載したエッセイをまとめたものである。

*2 OHV……オーバー・ヘッド・バルブの略語で、エンジンの形式の一つ。日本では、一九六〇〜一九八〇年代に製造された自動車の多くに採用されていた。

問一 〰〰〰 AとEのカタカナを、正しい漢字に改めなさい。

問二 (1) (2) (3) にあてはまる言葉を、次のア〜カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ もちろん ウ たとえ エ けれど オ または カ そして

問三 —— ①「謙虚なアプローチ」とありますが、その具体的な内容を示す言葉を、本文から五字以上十字以内でぬき出しなさい。

問四 —— ②「そういう価値判断」とは、現代人が、どういうものに価値を置いているということですか。二十字以内で説明しなさい。

問五 —— ③「生命の下手くそな不完全なコピー」とありますが、自動車が馬から（ア）写したものの（イ）写していないものを、それぞれ十字以内で説明しなさい。

問六 —— ④「一種の擬似生命の如くに動く」とは、どういうことですか。次のア〜オの中から、最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 機械が、人間の望みによって進化してゆく過程で、人間から独立した理性や本能を持ち始める、ということ。
- イ 機械が、人間によって造られたにも関わらず、いつの間にか人間にも制御できなくなっていく、ということ。
- ウ 機械が、人間によって開発される過程で、開発者の考えていることを自然に察するようになる、ということ。
- エ 機械が、人間の意志を叶えるために、その妨げとなる本能や理性を人間から消し去ろうとする、ということ。
- オ 機械が、人間の考えを、人間自身の身体能力をはるかに超えた段階まで実現することができる、ということ。

問七 —— ⑤「新しい」とは、どういうことですか。筆者の考えがわかるように、三十文字以内で説明しなさい。